

---

酒呑童子説話と土地の記憶 - 逸翁美術館所蔵「大江山絵詞」をめぐる -

学習院大学 岡本 麻美

---

「大江山の鬼退治」として現在でも親しまれる酒呑童子説話は、源頼光という武將を主人公とした酒呑童子征伐の物語である。当説話を題材にした作品は数多く、これらの作品群は酒呑童子の住処を基準に、「大江山系」と「伊吹山系」とに分類されている。それらのなかで、「大江山系」に属する逸翁美術館所蔵「大江山絵詞」(南北朝期前後の制作とされる)は、現存最古の作品であり、酒呑童子説話の受容とその変容を考える上でも重要な作品である。その制作や成立に関わる検討は、いくつかの可能性が提示されているものの、総合的な研究としては未だ中途の段階にあるといつてよい。

本発表では、日吉山王や法華経に関するエピソードをもとに叡山周辺での制作を示唆する先行研究を承け、「土地の記憶」というキーワードの下で、逸翁本固有のモチーフや表現の、更なる読み解きを行う。その結果として、この「叡山・日吉周辺」制作論は、いっそう補強されることとなる。

具体的な考察としては、まず、「ふたつの大江山をめぐるイメージ」を取り上げる。酒呑童子の住処とされる「大江山」は、古代においては山城国と丹波国の国境の大枝山(老ノ坂)が連想され、後には、丹後国と丹波国との間にそびえる大江山(千丈ヶ嶽)をあてる事が通説となる。前者(大枝山)に関しては、その境界性と鬼気という論点を取り上げ、後者では竜宮と海との関連を論じ、これらの土地が持つ記憶が逸翁本のモチーフといかに結びついているかを明らかにする。すなわち、逸翁本は、陰陽道や鬼・異形というイメージが、説話生成レベル・絵巻の詞書(テキスト)・絵巻の絵(絵画表象)と多層的な形で示されている。一方「大枝山」という場合は、境界性という地理的性格と、四塚祭という陰陽道祭祀から生じた異形イメージの集積という性格を有し、逸翁本にも、この「大枝山」の土地の記憶が投影されている。また、逸翁本における酒呑童子の住処は、異界として造形されているが、その絵画表象には竜宮イメージを窺うことができる。それに加え、逸翁本独自の唐人に関するエピソードは、「大江山」及び、そこに隣接する若狭の海の記憶に発端があり得たことを指摘する。

次に、逸翁本を特色づける、田楽や渡り物と呼ばれる「祭礼芸能の描写」を取り上げ、そのモチーフもまた、これらの地域との繋がりが見出せることを論ずる。

逸翁本には、鬼退治という物語文脈上において、不可欠とはいえない要素が多々含まれている。逸翁本は、そうした要素を排除せずに作品中に組み込んだのである。本発表では、上記の考察を通して、それら物語の軸に収斂しない様々なエピソードやイメージが、「二つの大江山」それぞれの「土地の記憶」を介することで、十全に読み解きが可能になるものであることを明らかにし、こうした重層化した「土地の記憶」こそ、本絵巻の制作と受容の場が必要とした枠組みであることを提示したいと思う。